

1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	工業高校の学びの特色を生かした自尊感情や人権意識の醸成
----------	-----------------------------

○調査研究のテーマを設定した目的

当该校では、学校経営ビジョンに「夢や志を持って主体的に希望進路を実現していく生徒の育成」を掲げ、「ものづくりから人づくり・絆づくり」をスローガンとし、教育活動に取り組んでいる。たくましい実践力と創造性に富む工業技術者の育成という使命と合わせ、地域に根ざし貢献できる活動を行うほか、平成30年には韓国の柳韓（ユハン）工業高等学校と交流締結をして、異文化理解や国際感覚を生かしたものづくりの意識を高める取組を行ってきた。

近年は、当该校に入学する生徒が多様化し、配慮を要する生徒やコミュニケーションが苦手な人間関係づくりに課題のある生徒も増えていると感じている。教職員はこれらの生徒の学びを支えるため、共感的、傾聴的であることを心がけ、生徒理解を深めるための校内研修を継続的に実施しているほか、分掌横断的な授業改善チームを立ち上げて探究的で深い学びの実現に取り組むなど、生徒が充実した学校生活を送るための工夫を重ねている。

令和4年度は、多様な生徒の学びをさらに支えるために、ユニバーサルデザインについて共通認識を図る教職員研修を行い、学校全体で取り組んできた。こうした取組によって、教職員対象のアンケート調査では、授業実践や指導方法への工夫、生徒への関わり方においても意識の高まりが読み取れる回答が増加した。一方、生徒については、他者とのかかわりが苦手であると感じている傾向が見られ、生徒同士の、安心して気持ちを伝え合い、困ったときに相談できる人間関係づくりについては、まだまだ課題が見られる。

その背景としては、自分の存在や考えを受け止めてもらえる安心感、受け止めてもらった経験に基づく自己肯定感や自己効力感が低いままであることが推察される。たくましい実践力と創造性に富む工業技術者として社会に貢献するためにも、身近な他者と人間関係を育み、協働する中で実践力や創造性を発揮していくことは重要な要素であると考えられる。

そこで、今年度は、多様な生徒が安心して学べる環境づくりの一層の充実を目指し、ユニバーサルデザインに基づく授業づくりの定着に取り組むとともに、工業高校の学びの特色を生かし、協働の中で互いの強みを発揮できる環境づくりに継続的に取り組んでいきたい。また、人権教育の視点から教育活動を充実させ、生徒同士が安心して能動的に人間関係を育むことで、生徒の自尊感情や人権意識を高め生徒同士が互いを認め合い、尊

重し合える人間関係を育む実践研究に取り組んでいきたいと考えた。

○調査研究の概要

工業高校の学びの特色を生かし、地域や社会への貢献を意識したものづくりに取り組み、活動を周囲から認められる経験を通して生徒の自己肯定感や自己有用感を育む。その過程における人権課題との出会いを通して人権課題への理解の深化を図り、自他の価値を感知し尊重する態度を育み、解決に向けた実践を引き出す。

ものづくりをはじめとする様々な教育活動における協働や話し合い活動を通して、自他の違いを認め、尊重し生かし合う人間関係を育む。

2. 基本情報

研究指定校の概要

○学校名

高知県立高知東工業高等学校

○これまでの研究指定等の状況

令和4年度文部科学省人権教育研究推進事業

○学級数

12学級（4学科3学年）

○児童生徒数（R.6.1.9）

全生徒数：245名

○URL

<https://www.kochinet.ed.jp/higashikogyo-h/>

○指定理由

令和3年度に創立60周年を迎えた当該校は、これまでも地域社会で活躍する人材を多数輩出しており、地域社会における人権課題を含む状況も変化する中で、関係機関と連携しながら、地域に根ざした工業高校としての役割を果たしてきた。また、令和4年度の新入生からは、男女の制服に統一感を持たせて新調し、女子はスラックスの選択も可能にするなど、社会情勢に応じた改革を続けている。

当該校では、近年生徒の実態が多様化し、教職員にも生徒の良さや課題を早期に発見する幅広い対応のスキルが必要とされている。この研究指定を契機に、学校経営ビジョンに掲げる人材の育成に向けて、いま一度、人権教育の視点に立って教育活動を捉え直し、教職員の人権に関する知的理解と人権感覚を高める組織的な取組を進めていきたいと考えた。そして、周囲から認められる経験を通して、生徒の自己肯定感や自己有用感を育む教育活動を実践し、さらに地域や社会への貢献を意識したものづくりを通して、生徒の自尊感情や人権意識を育むための研究を推進していきたいと考えた。

○取り組んだ人権課題について

該当するものに○印、最も主要な人権課題1つに◎印を付与

①子供	◎
②女性	○
③高齢者	○
④障害者	○
⑤同和問題	○
⑥アイヌの人々	
⑦外国人	○
⑧-1 HIV 感染者等	○
⑧-2 ハンセン病患者等	
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	○
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	
⑭その他 ()	

3. 調査研究の内容等

○調査研究の内容

研究仮説

ア 地域や社会への貢献を意識したものづくりに取り組み、成果や活動を周囲から認められる経験を通して、生徒の自己肯定感や自己有用感が高まる。

イ 特別活動やものづくりの過程における人権課題との出会いを通して、自他の価値を感知し尊重する態度や課題解決に向けた実践行動力が養われる。

ウ 教育活動における話し合い活動や協働を通して、自他の違いを認め尊重し、互いを生かし合う人間関係が育まれる。

※ 教職員研修及び校内推進会議等、県教育委員会の指導主事が指導・助言しながら研究内容の充実を図る。

○実施方法

①人権教育委員会が進捗状況を管理しP D C Aサイクルに基づいた組織的な調査研究を推進

管理職及び人権教育主任、各分掌部長、各科長、各学年主任で構成される本会を定期的に開催し、研究を推進するための実施内容の検討、校内研修の計画や調整、取組の振り返り等を行った。今年度は、人権教育の視点を意識した学習活動をより充実させることを目指して、教職員全体が共通理解のもと取り組んでいくことができるよう環境整備に努め、集約した意見や取組内容をまとめて適宜周知・共有を行い、方向性を確認しながら進めた。

②教職員の共通認識を高め、研究を推進するための校内研修の実施

・令和5年5月31日、高知県教育委員会人権教育・児童生徒課の協力を得て、「アンケート分析による共通理解」を実施した。研修では、本調査研究の内容について全体で共有し、今年度第1回のアンケート調査結果を資料として、グループ協議を行った。昨年度からの変化をもとに、生徒対象アンケートにおいて肯定的回答の割合が増加・減少した項目についてこれまでの取組を振り返り、今後の働きかけについて話し合った。各グループから出された内容は、学年会で整理した後、全体をまとめて取組の方向性として共有した。

・令和5年9月13日、1年生の4講座を公開授業として全教職員が参観し、授業後は分科会形式で研究協議を行った。公開授業は、統一した様式で学習指導略案を作成して授業を行い、人権教育の視点に立って参観するようにした。分科会では、授業展開の工夫等について意見交換を行い、高知県教育委員会事務局人権教育・児童生徒課による助言を通して学びを深めた。またその後の全体会は、研究授業の内容も踏まえて、神戸親和大学新保真紀子客員教授から「人権教育を活かした学習集団づくりと学びの

メソッド」と題して講演をしていただき、授業における人権教育の視点について確認することができた。

・令和5年10月5日、先進校視察では、愛媛県立今治工業高等学校で開催された、県立学校人権・同和教育訪問に教員2名が参加し、ロングホームにおける、人権課題についての公開授業を参観した。今後、自校のロングホームにおいて、人権課題を自分事として捉え、自主的・協動的に学ぶことができる展開の参考となった。

③生徒の人権意識と自尊感情を高めるための教職員の教育活動全体を通じた組織的な働きかけ

・9月中旬から11月、全教員による公開授業を、人権教育の視点を意識した授業づくりをテーマとして相互参観形式で実施した。人権教育の視点を入れた学習指導略案や授業参観シートは共通の様式を使用し、同一教科だけでなく他科・他教科の授業も参観しやすい形式としたことで、それぞれの指導法の良い点や改善点について広く共有することにつながった。実施した多くの授業で、共感的人間関係の育成や自己存在感をもたせることが意識され、見通しや内容理解につなげる視覚支援、タブレットを活用した意見の整理や個別課題の提示、発問や声かけの仕方等の工夫が見られ、学習形態では、生徒同士が協力しながら取り組む方法が取り入れられていた。授業改善において、他の授業実践から学ぶことや、他者から直接返される意見や感想は貴重であるため、各々が自身の授業と照らして学ぶ機会となった。

・人権教育ロングホームは、各学年の人権教育目標に従って、外部講師も活用しながら、クラス単位や学年全体で年間2回実施した。生徒は各回とも、授業の前と後で自身の中で変化したことについて振り返り、感想を書いて考えを整理することに取り組んだ。他者への理解を深めながら、自分らしく主体的に行動することや、自他を尊重して生かし合うに関係の大切さを学んでいる。

・10月には、韓国から柳韓工業高等学校の教員・生徒が来日し、コロナ禍で中断していた交流が4年ぶりに再開した。本校への訪問や県内企業の見学等では、生徒会役員の生徒が学校代表の役目を担い、歓迎式の準備等、日本のことをより深く知ってもらい互いの関係を築けるように考えて、工夫して取り組んだ。この経験は、生徒にとって異文化交流の貴重な機会になっただけでなく、他者を受容することの大切さに気づき、これからの展望について考え、より主体的に関与しようという意欲につながっている。また、高知県高等学校国際教育生徒研究発表大会に、2年生6名がチームを組んで初めて出場し、日本の工業技術が世界を支え、ものづくりの知識や技術を学ぶ本校をPRすることを目的に臨んだ。生徒たちは、役割分担のもと話し合いや調整を重ねて、工業について身近なものから理解できるように題材を選んだり、日頃学んでいることをいろいろな角度から調べる活動等を通して、工業高校生としての立場や工業が社会の中で果たす役割について考えを深めた。加えて本番では、自分たちの目的が達成できたことから、自己有用感や自己肯定感が高まっている。これは、企画から提案、

準備を通して、継続して関わった指導教員の声掛けや支えが、効果的に働いたことが大きかったと思われる。

4. 検証・評価・改善・普及

○検証・評価

年間2回（5月、11月）、教職員及び生徒対象にアンケートを実施して、取組を検証した。

教職員対象「人権が尊重された学校づくりチェックリスト」の結果では、推進体制に関する「PDCAサイクルに基づく計画・実施・検証」の項目で、肯定的回答の割合は2回とも100%であった。また「教職員の人権感覚を高めるための研修の実施」について、2回目と同様の結果が得られ、「十分である」とする回答は22.2%（令和4年5月）から51.2%（令和5年11月）に上昇した。人権教育委員会を定期的に開催して進捗確認等を行い、まとめた内容は適宜全体で共有する体制が作られ、組織的な取組が教職員に印象付けられたことや、校内研修を段階的かつ継続的に実施して理解を深めるとともに、全教職員が公開授業を通して実践を行うことで、実感につながった結果であると思われる。

環境づくりでは、「ユニバーサルデザインに配慮した学習環境」の肯定的回答の割合が48.9%（令和4年5月）から90.7%（令和5年11月）、教育内容に関する「生徒が主体的に活動できる場面の設定」では、82.2%（令和4年5月）から90.7%（令和5年11月）と増加した。取組を焦点化することでユニバーサルデザインへの理解が進み、教職員が従来行ってきた内容と照らして具体的に確認できたことから、授業をはじめとするいろいろな活動において実践に結びつける意識が高まったと考えられる。そして公開授業では、生徒が活動の中心であることを授業展開において意識し、生徒の自己肯定感に働きかける工夫を考えるなど、人権教育の視点を活かすことに取り組み、ホームルーム活動や学校行事においても、教職員それぞれが生徒の状況を把握して活躍できる環境を整え、いろいろな仕掛けや声掛けを行ってきたことを、各々が振り返ったからではないかと考える。

生徒対象の「人権に関するアンケート」では、「思う」と回答した割合は、「自分によいところはある」で34.9%（令和4年5月）から47.3%（令和5年11月）、「自分のことが好き」で23.5%（令和4年5月）から28.9%（令和5年11月）に増加した。教職員の人権意識の高まりが生徒への指導や声がけに波及効果をもたらし、生徒は良いところや頑張っていることを褒められる場面や、ホームルームや部活動等で役目を任せられることも増えて、自己の価値を感じるようになっていないかと思われる。また「地域や社会への貢献について考える」の項目では、18.0%（令和4年5月）から25.9%（令和5年11月）に変化し、自己に対する肯定的な態度が培われることによって、外に目を向ける意識が高まってきていることがうかがえる。

一方、生徒の人権意識に関する「いじめや差別を見たときの行動」について、「注意する」が41.0%（令和4年5月）から33.5%（令和5年11月）に減少し、「何もしない」が10.7%（令和4年5月）から20.9%（令和5年11月）に増加しており、態度的側面

には弱さが見られる結果となった。生徒の実態として、行動しても状況は変わらないという思いや、あまり関わりたくないと感じている面も読み取れる。今後は、生徒にとって最も身近である同世代の人間関係を良好にするための関係づくりを大切に、生徒の自尊感情を高める働きかけを継続しながら、他者の人権を守る適切な行動につなげられるような意欲や態度を養っていく必要がある。

【3側面ごとに設定した評価指標に基づく変容】

・知識的側面「高校生になって、授業やHRで学習した内容」

事業開始時:14 人権課題の平均 23.8%⇒事業終了間際：32.9%

【分析】自己を肯定的に捉え、自他のよさや違いを受け入れていくことの大切さについて理解を深めた。

・価値・態度的側面「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えることはありますか」

事業開始時：肯定的な回答の割合 60%⇒事業終了間際：肯定的な回答の割合⇒66%

【分析】日々の授業をはじめ、ものづくりや校内外での活動において、課題解決に向けて主体的にかかわろうとする態度が見られた。

・技能的側面「周りの人から自分が大切にされていると思うか」

事業開始時：強肯定の回答 35.3%⇒事業終了間際：強肯定の回答⇒41.4%

【分析】人ひとりの個性を伸ばし、他者に対しても価値を認めて尊重し、対等な関係を築いていこうとする言動が見られた。

○改善・普及

本調査研究の内容は、令和4年度の内容に加えて、令和5年度人権教育主任連絡協議会や人権教育研修会において実践報告を行い、普及を図った。令和6年2月6日には、研究発表会を開催し、高知県内外の人権教育担当者参加のもと、公開授業及び分科会、2年間の取組の研究報告、神戸親和大学新保真紀子客員教授による講演を実施した。また、各種アンケートの調査結果は、実態把握と取組検証の基礎資料とすることに加え、学校だよりや外部委員を含む会議で報告し、学校の取組について理解や協力を求める資料とした。

2年間の本研究によって、学校における人権教育は特別なプログラムの中で行われるものではなく、すべての教育活動において人権感覚を育み、人権を守ろうとする行動につなげていく取組であることを、学校全体で確認することができた。

今後もいろいろな教育活動において生徒とつながり、また生徒同士をつないで互いを生かし合う環境づくりに努めていきたいと考える。そのためにも、生徒に向き合い、様々

な思いや背景に寄り添いながら生徒理解を深め、自尊感情を育んでいけるような働きかけを続けていきたい。

5. 人権教育に係る年間指導計画

別紙

令和5年度人権教育年間指導計画

高知東工業高等学校

※人権課題の欄には以下のうちのいずれかを記入

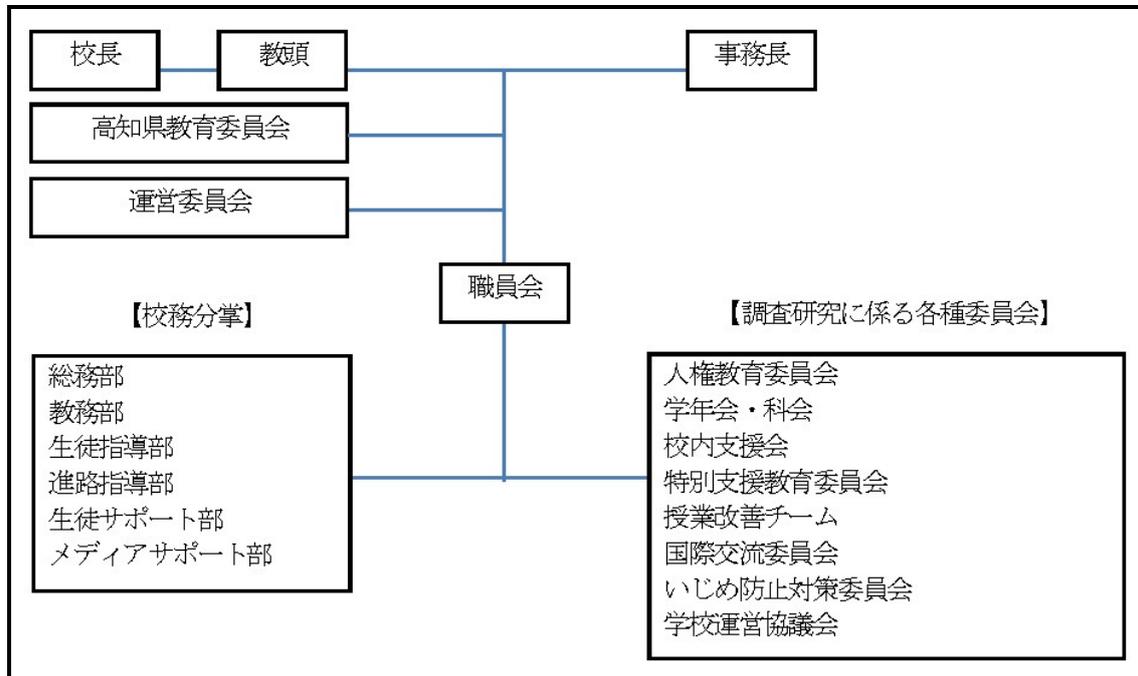
同和問題・子ども・高齢者・女性・障害者・HIV感染者等・外国人・犯罪被害者等
インターネットによる人権侵害・災害と人権・その他

学年	人権課題	1学期	人権課題	2学期	人権課題	3学期
一学年	子ども	自己理解・他者理解 【人権LH】 相互理解①(Q-U) 【LH】	障害者 子ども	講話「桃子ストーリー」 【人権LH】 相互理解②(Q-U) 【LH】	HIV感 染症等 その他	性感染症・エイズとその 予防 【保体】 持続可能なライフスタイルと環境 【家庭】
	女性 子ども	青年期の自立と家族・家庭 子どもの生活と保育 【家庭】	障害者 高齢者 その他	精神疾患の特徴 【保体】 高齢期の生活と福祉 共生社会と福祉 【家庭】		
	外国人 同和 問題	異文化理解 【外国語】 日本の生活・文化 【地理総合】				
二学年	子ども 高齢者	相互理解①(Q-U) 【LH】 高齢者体験学習 【人権LH】	子ども	講話「ヤングケアラーについて 考えてみよう」【人権LH】 相互理解②(Q-U) 【LH】		
	子ども 女性	思春期と健康 【保体】 性意識と性行動の選択 【保体】	HIV感 染者等 その他	薬物乱用防止 【LH】 生活を豊かにする提案 【外国語】		
	高齢者 外国人 同和 問題	中高年期と健康 【保体】 日本の歴史・生活・文化 【公共】				
三学年	同和 問題	進路と統一応募用紙 【人権LH】	人権 全般	講話「社会における人とのつ ながり」 【人権LH】	障害者 高齢者 外国人 等 人権 全般	地域貢献・ユニバーサルデ ザイン 【課題研究】 人権教育アンケート 【HR】
	インタ ーネッ ト	サイバー犯罪 【LH】				
	外国人	人種・民族紛争【世界史A】				

○教職員研修計画

研修内容	実施月
・校内研修（研究に関する共通認識を図るための内容）	5月、9月、2月
・全定合同校内研修（生徒理解にかかわる内容）	12月
・南国市人権教育研究大会	8月

6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）



○関連資料

3 1 高知県

5 2 高知東工業高等学校



廃棄する予定だった古い作業台を再利用し、平均台を製作して保育園に寄贈

子どもたちが遊べる滑り台を製作



人権課題への理解を深めるLHRでの体験活動